

会員紹介：天谷和彦さん

私の略歴



1984年4月、栃木県宇都宮市生まれ。2010年、国際基督教大学（ICU）教養学部国際関係学科卒業。中小企業支援の財務コンサルタントを経験後、2012年、イギリスのイーストアングリア大学大学院 開発学修士課程修了。アフリカで開発コンサルタントとして4年勤務後、国際機関アジア生産性機構（APO）事務局で2年勤務。その後、国際協力機構（JICA）アフリカ部の特別嘱託（スペシャルアドバイザー）として勤務。

特技としての語学

実はクアドリンガル（4か国語話者）です。昔から国語の授業で教科書を音読したり、長文を読解するのが好きでした。英語は得意でしたが、ウィーン留学時代にドイツ語を勉強し、ドイツ語検定準1級レベルまで習熟しました。ドイツ語の会話は下手ですが、今でもドイツ語の文章を読むことができます。また、フランス語についてもフランス語検定の2級～準1級程度まで修得しました。社会人のスピーチクラブであるトースト・マスターズクラブ（フランス語版）の会長を2017-2018年の間に一年勤め、現在も勉強を続けています。

大学・大学院時代

大学時代

大学時代はインドでボランティアを経験後、オーストリアのウィーンに留学しました。現地の Institute for International Education for Student (IES) program Vienna に唯一の日本人として学び、寮ではオーストリア人、ポーランド人などに囲まれ拙いドイツ語で生活をしていました。ウィーンでは国際経済学を学びました。中東欧の旧社会主義国が「経済自由化」を進める過程で幼稚産業の保護・育成に成功し、経済成長に成功したり、逆に失敗し、大量の企業倒産を招いてしまったりする過程がとてもエキサイティングだと感じ、これをきっかけに途上国の経済政策や産業振興に関わるようなキャリアを歩みたいと思うようになりました。

大学院時代

進学したイーストアングリア大学大学院では開発学部「グローバリゼーションと開発学科」に属し、興味があったインドの経済自由化政策を始め、アジアの工業化政策（東アジアの奇跡）、アフリカへの海外直接投資（FDI）、多国籍企業の製造業のバリューチェーンなどについて学びました。

従事した仕事の内容

財務会計コンサルタント時代

新卒では中小企業の財務会計コンサルタントを経験しました。元々、国際協力・援助業界を志望してはいましたが、2009年当時、就職氷河期の中で国際協力関係の就職はで

きませんでした。一方、地方の中小零細企業支援にも興味があり、財務会計を覚えると将来、国際協力や民間企業での仕事に役立つだろう、との考えから税務会計のコンサルティング企業に入りました。ここで商業・工業簿記や英文簿記を習得しました。北関東の小さな自動車部品工場や建設会社、農業組合などを回り、財務諸表の分析をしていましたが、国際協力の道に進みたいと想い、数年で退職して大学院に進学することにしました。

開発コンサルタント時代

2012年の秋に大学院を終え、日本に帰国後、2015年末まで開発コンサルティング企業二社に約4年間勤務、インドネシア、ヨルダン、ケニア、モザンビーク、ザンビアなど



開発調査：タマネギを作っていた女性農家組合と



技術協力：広報担当として地元のラジオ番組に出演

で JICA のプロジェクトに従事しました。アジアでは有償資金協力(円借款)・無償資金の実施管理、中東で研修管理、アフリカで農業金融の開発調査、開発調査型技術協力(品質・生産性向上プロジェクト)の実施管理、電力案件の経済分析などを担当しました。より具体的な業務としては農家・アグリビジネス企業の経営分析、調査団の業務調整、パイロット企業の選定、広報としてプロモーションビデオの作成なども担当しました。

技術協力の業務調整(コーディネーター)としては車両手配、安全管理、スケジュール管理、宿泊施設手配などロジスティクスや、チーム内の意見の相違を上手に乗り越えていく術を覚えました。パイロット企業選定では現地の商工会議所や製造業協会に足繁く通い、有望企業候補の情報リストを作り、最大で20人ほどのプロジェクトチームの人員を管理・調整し、二週間で40-50社を訪問させたこともありました。プロジェクトのプロモーションビデオ作成では、脚本・監督を担当し、現地の撮影会社を採用し、カメラマンチームを指揮して、50シーンの撮影に挑みました。品質・生産性に関するビデオでしたが、とある省庁の重要な撮影シーンではカメラマンチームが大幅に遅刻してしまい、焦りました。先方の事務官には「君たちがまず品質・生産性を上げたらどうかね?」と皮肉を言われ、冷や汗をかいたのを覚えています。

この頃は海外コンサルタント協会(ECFA)、国際開発機構(FASID)、日仏学院(Institut français)などに大変お世話になり、プロジェクト・サイクル・マネジメント(PCM)、財務経済分析(IRR・ERRの算出)、地理情報システム(GIS)、フランス語検定などの各種実務的な資格を取得しました。

国際機関事務局時代

開発コンサルタント勤務後は、地域的な国際機関であるアジア生産性機構(APO)に農業部に属し、プロジェクトアシスタント/コーディネーターとしてAPO加盟国の20カ国でアグリビジネス、eラーニング、国際会議など、2年間で40件ほどの短期技術協力を管理運営しました。東京のAPO事務局から外国人の専門家(リソースパーソン)や、各

国に居る渉外担当職員（リエゾンオフィサー）と協力しながら、遠隔で短期の研修を管理していました。



台湾で行われた生体殺虫剤・生体肥料の国際会議に出席



国際機関、世界蔬菜センター（AVRDC）で研修参加者たちと共に圃場を視察

主に担当した研修事業はアグリビジネス、食品安全管理、農作物のバリューチェーン改善、生体殺虫剤・生体肥料づくり、危害分析重要管理点（HACCP）、適正農業規範（GAP）、収穫後の野菜・果物の保存技術などでした。国としてはバングラデシュ、パキスタン、フィリピン、スリランカ、中華民国（台湾）、ヴェトナム、インドネシア、カンボジア、ミャンマー、タイなどでのプロジェクトの実施管理をしました。実際の作業としては、上司のプログラムオフィサーと協力しながら、研修プロジェクトの企画書づくり、予算確保、専門家の選定・契約、研修参加者の公募・選定・契約・渡航支援、航空券・ホテル・通訳・翻訳等の手配、会議運営など「旅行業者」的な部分がありつつも、農業の知識もある程度、必要とされ、「農業のシンクタンク」的な部分もありました。

研修プロジェクトは多くのステークホルダーが関わり、南アジア地域協力連合（SAARC）、アジア環太平洋地域統合開発センター（CIRDAP）、世界蔬菜センター（AVRDC）、日本生産性本部（JPC）などとの共催プロジェクトも含まれます。二年間で関わった専門家（リソースパーソン）は約 50 名に上りました。この中には OECD、FAO、東アジア・地域研究センター（ERIA）、世界銀行の職員なども居りました。また一つの研修に 10-20 名の参加者が居り、選定・派遣支援をした研修参加者は合計 500 名以上に成りました。個別のプロジェクトのみに従事していた開発コンサルタント時代と比べますと、現場からは遠くなりましたが事務局を拠点（ハブ）として大規模に技術協力を展開することに醍醐味を覚えました。

また、産業・工場開発などを中心にキャリアを築いてきた自分としては農業技術に触れるのは、初めてでした。偶然にも農業部に所属した事で、農業にも興味が沸き、時間を見つけては農場の視察に行ったり、農業の研修に自主的に参加していました。結局のところ、途上国に於いて 8 割の人口が農民かつ貧困層であり、仕事で世界の貧困削減を目指す時に農業は切っても切り離せない関係にあると思います。例え部分的であったとしても農業生産の実態を自分の身を持って把握しておくことが経済政策や産業開発に関わる時に重要になってくると考えます。

現職：国際協力機構

APO の後、2017 年末から国際協力機構（JICA）アフリカ部に転職し、現在（2018 年 6 月）に至ります。現職では、南部アフリカ地域の経済回廊開発、インフラ、民間セクター振興、農業開発プロジェクトなどを担当しています。特に南部アフリカ開発共同体（SADC）の開発金融機関や、ナミビア、ボツワナ、スワジランド、レソト、マラウイ、南アフリ

カなどの貿易円滑化、ワンストップボーダーポスト/OSBP 支援などに携わっています。

仕事上の苦勞と喜び

開発援助を調整・実施する者として、どうしても「選択」をしなければいけないのに苦勞を感じています。限られた資源・投入（予算・ヒト・モノ）、制約、それぞれの国の開発目標、個別のプロジェクト目標、個別組織の事情などを勘案して、どうしても対象とされる専門家、裨益者／選ばれる人達、非対象／選ばれない人達／後に回さないといけない人達を選択していかなければ行けません。選択によって、自分に不利益や苦勞が掛かる覚悟はありますが、誰か他人が不利益や苦勞を被らざるを得ない場合、それを最小限にできるように苦心します。開発援助は、新しくて有益なものを作り出していく「攻めの仕事」ばかりではなく、有限の資源を取捨選択し、不利益を減らす「守りの仕事」も行わなければなりません。開発援助は理想だけではできない仕事だと思いますが、難しい現実と折り合いを付けつつも、理想に近づけていくことを常々、忘れないでいたいと思っています。

一方、仕事の喜びは、自分が途上国の社会構造を変えることに関われていることです。自分が出すEメール、作る書類、会議をする人達、身に付ける知識・技術、全てが世界を変えることに繋がっていると考えています。人間の喜びの一つに「共同体の発展・存続に寄与できること」が在ると本で読んだことがあります。自分の喜びは「自分の存在を通し、他人や人間社会そのものが発展したり、維持・存続していくこと」です。また、この仕事を通し、素晴らしい能力を持った多種多様な専門家、上司、同僚に出会い、ネットワークを広げられることも喜びです。

私の生き方



性格：子どもの頃に読んだ絵本のキャラクターで「泣いた赤鬼」の青鬼と、「三銃士」のダルタニャンが好きでした。青鬼は、親友の赤鬼のために悪者を演じ、ダルタニャンは騎士道のために必死に馬を走らせます。どちらも自分が泥を被ってまで他人を守ろうとする姿勢が格好良いと思いました。自分の性格的にも人を世話したり、サポートする仕事が向いているようです。また援助プロジェクトのコーディネーターを長く務めたおかげか、細かいところまで何度も確認する非常に慎重な性格になりました。自己評価としては公的機関での援助調整役やチームプレーに向いていると思います。自分が前に行くのではなく、自分の仲介や調整によって仕事上の顧客、裨益者や、プライベートで関わる周りの人達が能力を発揮できたり、自分らしい道を歩めるのが理想です。

哲学：精神的にとっても打たれ強く、現状に対する肯定力があり、前向きな性格をしています。色々と事前に考えて、熟慮し過ぎる心配性なところもある反面で、まずは何事も活動を始めてみる行動家な二面性があります。「無知の知」ではないですが、分からないことを無理に分かったつもりになったり、納得したりせず、「分からないままでも試してみる」、「失敗しても歩み続ける」をモットーにしています。